

## 巻頭言

大東文化大学スポーツ・健康科学部看護学科 学科主任

杉森 裕樹

2020年1月、中国湖北省武漢市で原因不明の肺炎が発生した。それ以来、全世界が新型コロナウイルス感染症(COVID-19)の猛威にさらされ、多くの医療従事者の奮闘にも関わらず、おびただしい数の犠牲者を出し続けている。この感染症のニュースが報道されない日はなく、日本では東京オリンピックも延期となる事態となった。2020年はこうして新型コロナ一色のまま、あっという間に過ぎて、新しい2021年を迎えた。人類と未知の感染症との闘いに終わりはないのだという事実には、自然界での人間の非力さを痛感するしかない。

一方で、このような時代にあっても、互いに叡智を集めて、柔軟に環境に適応できる人類のしなやかさ・力強さも確認できた年でもあった。新型肺炎のワクチン開発も5年はかかると当初言われていたが、特例承認ではあるが、いまのところ大きな副作用も報告されず、2021年に入りわが国でも医療従事者から接種が始まった。一昔前では考えられないことである。また、オンラインによる授業や会議やテレワークも、一度開始してみるといまや生活になくてはならないものとなった。マスクを付けて三密を避ける新しい生活様式もいつのまにか日常の風景となりつつある。

世界には人類を脅かす感染症がいくらでもある。世界的に大流行を起こした19世紀のコレラ、20世紀のスペイン風邪(インフルエンザ)、そして21世紀に同じコロナウイルス属による二大感染症、SARSとMERSなどがその良い例である。また、いまもって治療法のない難病も多い。そういった病気の原因と対策を知るうえで、これまでの医学の成り立ちを振り返り、先人たちの知恵に学ぶことはますます重要性を増してきたと思われる。

この大東看護学ジャーナルも、その一端を担える媒体として発展していくことを切に望む。

2021年吉日